

コロナに振り回された2020年。さて、2021年はどんな年になるのでしょうか。今月号は、13HR図書委員さんの担当です。自分たちのオススメだけでなく、黒上先生にもインタビューしてきました。さあ、図書館便りを参考に、新しい本との出会いましょう！



○13HR図書委員浜田&湯佐のオススメ 勉強の合間の気分転換に読んで欲しい本！

『 ようこそ実力至上主義の教室へ 』

衣笠 彰梧 著



アニメ化もされている、わくわく、どきどきする作品です。希望する進学、就職先にほぼ100%応えるという全国屈指の名門校、高度育成高等学校。毎月10万円分支給され、新設備の利用など、まさに楽園のような学校。だが、その正体は優秀な者だけが好待遇を受けられる実力至上主義の学校で…。

ある理由から入試で手を抜き、最底辺Dクラスに配属された清隆でしたが、その天才的な能力と才覚のため、クラス間の激しい攻防やクラス内の策略に巻き込まれて…。清隆がどう出るのか！そこにいつもワクワクしてしまいます。読んだらハマると思うので、ぜひ読んでください！



『 雨の降る日は学校に行かない 』

相沢 沙呼 著

学校生活に息苦しさを感じている女子中学生の憂鬱と、かすかな希望を描き出す、6つの物語です。一つずつ話は違うけれど、読み進めていくと、あれ？この名前見たことある…など、6つの物語はつながっていることが分かります。短編集なので、勉強の合間に読みやすいと思いますよ。



『 どこよりも遠い場所にいる君へ 』

阿部 暁子 著

ある秘密を抱えた主人公月ヶ瀬和希が主人公です。「神隠しの入り江」で倒れている一人の少女との出会いから始まる物語です。いろいろな人の心情の変化が描かれていて、読みやすいです。えっ!?!と驚かされるシーンもいっぱいあります。切なくて爽やかな話が好きな人!ぜひ読んでください!



『 告白 』

湊 かなえ 著

私が大好きな湊かなえ先生のデビュー作です。我が子を校内でなくした中学教師による告白から物語が始まります。語り手が変わることにより、事件の真相が明らかになっていくところや、綺麗な伏線回収が見所です。

○黒上先生のオススメ本

『九十三歳の関ヶ原』

近衛龍春 著

現在、NHKで放映中の大河ドラマ「麒麟がくる」もフィナーレが近づいていますが、今回紹介する「九十三歳の関ヶ原」の主人公、大島光義もこの時代を生き抜いた実在の武将の一人です。

彼の父親、大島光宗は永正12年(1515年)に多くの家臣とともに討ち死し、光義はわずか8歳で孤児となって親族に預けられたところから波乱万丈の人生が動き出します。小説では光義53歳、桶狭間の戦い直後の信長による美濃攻めの一場面から始まり、ここで対峙する光義の射た矢は信長の本陣旗に刺さり、信長軍の進軍を止めます。

もうお分かりかと思いますが、大島光義は弓によって立身出世した武将で、14歳で初陣を果たすと弓の腕前で次々と武勲を立てます。戦乱の世故、主家は次々と没落してゆきますが、光義はそのたびに弓の腕前を買われて新たな主君につき、出世してゆきます。一時は敵であった織田信長にも足軽頭として200石程で召し抱えられると、その後は豊臣秀吉の元で弓足軽大将(6,000石)、慶長5年の関ヶ原の戦いでは93歳という高齢で徳川家康側の戦陣に立って武功を上げ、この功績で美濃関藩を治める18,000石の大名となります。この大島光義一代記を、作者の近衛龍春は多くの創作を交えながらも生き生きと描き出します。

彼は老境に差し掛かってからの出世が目立ちますが、ゆえに自身の老いと闘いや鉄砲に取って代われようとする弓の在り方など様々な問題と向き合い、様々な工夫と努力を積み重ね、彼なりの答えを導き出してゆく過程が興味深く記されています。途中、女性と絡む場面では光義の純真無垢でまっすぐなキャラクターを感じさせるなど物語に変化をつけつつも、誰もが知る歴史上の大きな戦いはむしろ簡潔に書かれ、全体はテンポよく進み、一気に読み進めさせる歴史エンターテインメントとしてお勧めの一冊です。なお、関藩自体は光義一代で潰れますが、子孫は旗本として繁栄を続けて現代に至り、彼の使用した甲冑なども残っています。



2月号は11HR&12HRが担当します。お楽しみに!

